

## 小林利通宛タカクラ・テル書簡

山野 晴雄

小林利通氏は、長野県立高校の教員のかたわら、『上田近代史』(上田市、1970年)で上田市地域の  
大正デモクラシーを執筆され、また、信濃毎日新聞に「自由大学の遺産」を連載され、没後『日本近代史の地  
下水脈をさぐる－信州・上田自由大学への系譜－』(梨の木舎、2000年)にまとめられました。晩年は、  
タカクラ・テルの評伝研究を志し、史料調査・収集をされていましたが、亡くなられ、収集された史  
料やノート類は奥様より山野に贈られました。

その中に小林氏宛のタカクラ・テルの手紙が残されており、今後のタカクラ・テル研究に重要と思  
われるものを紹介することとした。

### ① 1970年5月11日

コバヤシ・トシミチさま、  
お手紙ありがたくいただきました。

1970.5.16

「上田近代史」お送りくださいませ、心から感謝いたしました。さっそくお手紙でお礼申しあげ  
ましたが、お手にわたりましたでしょうか？ そのなかでも申しあげましたことですが、困難な材料  
をよく整理されて、わたしたちはとくべつな喜びをかんじたしだいでした。

いろいろお仕事のうえでのご苦心・ご困難、お察し申しあげます。わたしもぜひお目にかかってい  
ろいろお話しあいをしていきたいと思います。で上京の日どりをおしらせくだされば、お待ち申しあげ  
ます。一昨年から、心臓で、あまり外出や努力はとめられておりますので、たいてい家におります。

ご返事だけ申しあげました。お目にかかって何事も申しあげます。  
クラシマ先生ご夫妻にくれぐれもよろしくあつたえ願ひあげます。

タカクラ・テル

### ② 1971年10月21日

(消印) 昭和46年10月22日

自由大学研究会のおしらせ、ありがたくいただきました。皆様のご研究に心からの期待をよせて  
います。

山宣記念碑再建の実行委員のほとんど全部が自由大学の関係者でした。そこに研究の一つのカキが  
あるように思います。

皆様によりよくおつたえください。

### ③ 1972年3月23日

(消印) 昭和47年3月24日

コバヤシ・トシミチさま、

3-23

お手紙いただきました。

自由大学の研究、これはこれからの問題ですが、すべての人人の見方のうちで、一つ、落ちている  
点があるように、わたしには思われます。それは一般的教養と実践の問題です。自由大学の歴史はそ  
れを具体的に示しています。

自由大学の発足は、

( 一般的教養  
勤労者の立場

この二つがきわめて不十分な形で結びついたものだったと、わたしは考えています。わたしが参加したのもそうだったし、ツチダの考えもそうでした。その勤労者の立場には、主催者や講師のあいだに、実に大きなひらきがあったのです。そして、そういう条件で自由大学が成立しえた条件は当時のニッポンの社会情勢でした。

かつてない大恐慌

(ことに、ナガノ県養蚕・製糸・農業のかいめつ)

軍国主義・ファシズムの支配

(中国侵略、青年の出征)

それまでも進歩的だったナガノ県の青年、とくに蚕種業の中心だったウエダ付近に、とりわけこの自由大学の要求が高まったのでした。

自由大学 10 年間の経営のうちに、量的・質的な変化がおこりました。さらに情勢が変化したからです。学生もしだいに貧農・労働者が中農・プチブル層を圧倒するようになりました。それは、自由大学に、知識より分析を多く要求するようになりました。とうぜん、それは「教養」から「実践」の方向へ進みます。ウエダの付近が、1931 (ショーワ 8) ~ 1933 (ショーワ 10) ごろまで、全国農民運動の中心の一つであり、そして、もっとも理論的な運動をつづけ、ついに、1933・2・4、あの 1,000 人ちかい大弾圧を受けたのは、このためでした。

教養から実践へ。

いま、自由大学を復活したいという要求が、しきりにわたしの所へもとどきます。それは、今の情勢が 1933 年ごろとひじょうによく似てきた点があるからだと思いますが、しかし、本質的には、全くちがっています。

大恐慌の予感

軍国主義・ファシズム復活の予感

それは、ふた子のように似ていますが、しかし、今のニッポン帝国主義は、見かけは世界第二の資本主義国になっていても、アメリカ帝国主義に従属してやっと成立している、きわめてきそのよわい帝国主義で、その弱さはげんにどんどんばくろされています。世界情勢の急速な変化は、いっそうろこつにそれを示しています。

自由大学は、いろいろの意味で、復活してもよいとわたしも考えていますが、それには、自由大学の歴史の研究と現在の情勢の科学的な研究をきわめて正確に結びつけることが必要でしょう。その意味で、皆さんの自由大学研究にわたしは非常に大きな期待をもっています。

わたしは、先月 24 日から、流感から肺炎にやられ、入院していましたが、あぶない所をどうにか助かって、退院、いま自宅で療養しています。

タカクラ・テル

④ 1973 年 6 月 22 日

(消印) 昭和 48 年 6 月 23 日

コバヤシ・トシミチさま、

1973.6.22

お手紙と"自由大学研究"第一号、いただきました。皆さんのお骨おりで、わたしたちの気のつかなかったことがつぎつぎに明らかにされ、心から感謝しています。

で上京の折には、いつでも、ごつごうのよい時に、お立ちよりください。医師から外出はとめられていますので、いつでもおります。一時間ていどの話しは許されています。

わたしの仕事はまことにそまつなもので、お恥かしい次第です。しかし、時代を知るために何かのお役に立つなら、こんなしあわせはないと思っております。来月 20 日、わたしの「ツルの巣ごもり」につぐ「シカの遠音」と「唐人おきち」が労音で演奏されます。テキストができましたら、お送りするつもりです。

どうかおからだをたいせつにしてください。

タカクラ・テル

⑤ 1975年6月22日

おたより、資料いただきました。

いろいろお骨おり、心から感謝いたします。

資料（伝記）については、わたしの文献が誤解をまねいた原因を作りだしている点があるのわかりました。念を入れて訂正したいと思います。

自由大学雑誌については、考えてみました、できれば、なにか書きたいと思っています。

奥さまによろしくおつたえください。

タカクラ・テル